社会科専攻の初年次演習試案

近藤　裕幸
（社会科教育講座）

First year experience for new students in social studies course：a draft plan

Hiroyuki KONDO
（social studies course）

要約：新入生が大学教育にスムーズに移行するための、高校生の視点からの大学導入教育プログラムの開発と、教員・自己・他者による評価方法をとりいれた初年次演習のプログラム作成を試みた。
キーワード：大学教育、高等学校教育、橋渡し、評価

1　はじめに

2013 年度より愛知教育大学で「初年次演習（仮名）」が導入されることになった。そこで、担当者である筆者は、社会科専攻で実施するとしたらどのような形が考えられるのか、その演習内容を作成することになった。

たしかに、筆者が所属する地理学専修では 3 年生の後期に 1 万字のレポートを書かせる演習があるものの、3 年生が対象であり卒業論文執筆を意識して置かれている科目である。社会科の他専修（哲学・史学・地理・法経社）では初年次演習と類似した内容のものがあるのかもしれないが、公式なものではない。

また、社会科専攻の場合、1 年生の後期に哲学・史学・地理・法経社に専修分けが行われるため、前期に実施される初年次演習において各専修の専門的な内容や基本的な技術（地域調査法・読図など）を盛り込んでプログラムを作るわけにはいかない。必然的に 4 つの専修に共通するような大まかな内容編成となる。

さらに、学内で実施された理科や技術科での少年次演習の先行例があるものの、まだ多くの講座では暗中模索の状態で言わざるをえない。大学内の先行例の不足を補うために、今回のプログラム作成にあたり多くの出版物または HP を参考にした。そこに通底している考えとしては、「高校までの受動的な学習から大学での能動的な学びへと転換させる」ことが挙げられていた。

ただ、どの先行例をみても、高等学校の授業方法を踏まえた上での初年次導入学習とは言いがたい。どのように学びの質が転換するのかを具体的に扱っているものは少ない。たしかに新入生は大学での授業は高校とは違っていることは薄々感じて入学してくるので、それなりの覚悟をもって新学期の授業を受けているのだろうが、実際のところは少なからず戸惑いのなかで日々過ごしているのではないだろうか。そうした新入生に対して、入学当初に高校生の視点を取り入れた大学の授業作りがあってもよいのではないかと考えた。

また、先行例では単位認定については最後に学生に書かせたレポートの完成度で評価するという考えがみられた。たしかに、レポートを書き上げることによって学生の総合的な実力が判断できるため、それは有効かもしれない。しかしながら、それ以外にも、取り組む姿勢や発表の技術などを評価することで、多様な側面からの評価の必要性を感じた。

そこで、本稿では、高校生レベルの視点に立った導入教育のありかたと、多様な視点からの評価を取り入れた初年次演習のプログラムを作ることとした。

ただし、表題に「社会科専攻の初年次演習」とあるが、社会科専攻の 4 専修にはそれぞれの担当者がいるので、あくまでも筆者の考えにもとづく試案であることをお断りする。

2　目標と方法

（1）目標

この演習の目標は、「高等学校までの受動的な学習から大学での能動的な学びへと転換させるために、専門教育への橋渡しとなる基本的な考え方や方法を修得する」こととした。初年次演習の先行例でもみられる一般的な目標と言える。

この科目は専門教育への橋渡しが目的であるから、1 年生前期で実施することが好ましいが、どうしても履修できない場合には、2 年次以降でも履修させるべきだと思う。一般的に、単位を落とすということは、レポートの書き方などの基本的なスキルが身についていないことが原因と考えられるからである。

（２）方法と４つの観点

具体的な授業方法は、講義・作業・ディスカッションの三本柱で行う。課題も多く課する予定である。

授業を行うにあたり、4 つの観点を意識して行う。「大学での学びのために、基本的な技術や思考方法を身につけ（知識/理解）、世の中のできごとや他社の意見に興味をもち（関心/意欲）、他者とともによく考えたのち自分の考えをまとめ（思考/判断）、それを発言･発信する（表現）」とした。

３　授業内容

（１）全体の構成

全 15 回の授業をⅠ～Ⅵ部に分割し、各部ではテーマを掲げた。テーマを提示することによって、何のために初年次演習を行うのかという目的を明確にするためである。

部（回）	テーマ
Ⅰ部　導入　(1-2)	「大学の先生はそんなに親切じゃない」
Ⅱ部　獲得する　(3-7)	「入力しなければ考えることもできない」
Ⅲ部　思考する　(8-9)	「ひとりで考えるよりもみんなでやるといいこともある」
Ⅳ部　まとめる（10-12）	「書くことで考えを整理できる」
Ⅴ部　発信する（13-14）	「考えた事を人に伝えなければ意味がない」
Ⅵ部　未来をみる　(15)	「いきあたりばったりの人生ではいけない」

では、以下に各回の内容を概観する。

（２）各回の内容

①第 1 回（Ⅰ部）「オリエンテーション／自己紹介・他者紹介など」：大学生活が始まっての感想、どうして愛知教育大学に入学したのか、将来どうありたいか等を皆で話しあう。(ゲストティーチャーとして上級生に来てもらってもよい)。第１回は話しやすい雰囲気を作ることが目的なので、いくつかのアクティビティ（活動；イメージマップやブレインストーミングなど）をとり入れる。

②第２回（Ⅰ部）:「高校と大学の違いを知る」：高校と大学の授業の違いを体感することが目的である。具体的には、学術論文をもとにした講義、その後にそれを高校の授業風にアレンジした授業を実践し、その違いを感じさせたあと、話し合う。（高校と大学の授業を入れ替えても問題ない）

③第３回（Ⅱ部）:「書く（メモ・ノートのとりかた)」: この回から具体的な技を学ぶ。大学の授業（講義）でとったノートを持参させ、その授業を再現させる。再現できればノートの取り方に問題はないと判断する。その後、メモの取り方のポイントを講義する（略語の使い方・ポイントとなることば等)。最後に、文章を読み上げ、メモをとる練習をする。

④第４回（Ⅱ部）:「聴く（インタビュー)」：クラスの友人にインタビューする。インタビューのポイント、エチケットなどを教える。また、情報獲得の大変さなどを体験させる。前回の「メモ・ノートのとりかた」とも関連づける。

⑤第５回（Ⅱ部）:「調べる１（インターネット・図書館)」：図書館で本を探す方法を司書のかたからご指導いただきたい。インターネットでの情報の扱い方についても注意を与え、著作権などについても取り上げる（著作権を扱う時間がなければ後日実施する)。

⑥第 6 回（Ⅱ部）:「調べる２（文献を読むために)」：文章の要約練習をする。その後、自分の考えを述べさせ、後のレポートの書き方への準備とする。書評を書かせるイメージで実施する。

⑦第７回（Ⅱ部）:「調べる３（自分を広げるために)」：興味のない分野（社会科関係以外など）の本を読み、自分の裾野を広げる。読書をする習慣について考えさせ、教養の必要性についても講義する。

⑧第 8 回（Ⅲ部）:「議論する１（簡易ディベート)」：短時間で行えるようなディベートを行う。最初は「考える時間１分・立論１分・考える時間１分・反論１分・反論２分・考える時間１分・最終弁論１分程度で行う。3 人ひと組で一人は判定する。最初のテーマは「ペットにするなら犬と猫どっち？」で始め、次に社会科らしいテーマで実施する。物事を複眼的に捉える練習である。

⑨第９回（Ⅲ部）:「議論する２（ゼミとは何か)」：短い論文を使いゼミの形式で質疑応答する場を提供する。質問することも役に立つということ、刺激しあい、皆で考えを練り上げていくことの大切さを感じさせる。

⑩第 10 回（Ⅳ部）:「レポートを書く１」：事前に課したレポート（A4 用紙 1 枚）を用い、新入生が回読し、どれがわかりやすかったかを検討し、どう書くといいのかの基本的なことを講義する。

⑪第 11 回（Ⅳ部）:「レポートを書く２」：再度宿題として書いてきたレポート（A4 用紙 1 枚）を使い、今回は全員の前で発表させる（第 13 回の「発表」へとつなげる)。誰のものがいいかを検討させる。

⑫第 12 回（Ⅳ部）:「レポートを書く３」：前半は

第 11 回と同じ内容を行う。授業の後半では、第 14 回で行うパワーポイントによる発表のためにスライドの作り方を説明し、作成するように指示する。
⑬第 13 回（Ⅴ部）:「発表する１」: 声の「大きさ、高さ、速さ、音色、間（ま）」を意識した話し方の練習をする。体を動かしながら、さまざまな活動を行う。
⑭第 14 回（Ⅴ部）:「発表する２」: 宿題としていたパワーポイントのスライドを発表させる。人数の関係でグループにするかもしれない。題材は今までに書いたレポートを用い、5 分間で発表する。
⑮第 15 回（Ⅵ部）:「４年間のライフデザイン（夢を語る）」: これからの大学生活をどのようにすごしていくかを「決意表明」させる。そして、半期の全体的なまとめを行う。

次に、第 2 回の授業内容の概要を次に述べる（第 1 回はオリエンテーションなので省略する）。

４　第 2 回目の授業例

（1）目的と内容

高校と大学の授業の違いを体感させることが目的である。内容は、ある学術論文（地理学）を高校風の授業（30 分）にして実践した後、大学風の講義主体の授業（30 分）を体験させる。2 つの授業のあと、ディスカッションを行う。

（2）授業の差異

2 つの授業をある程度ステレオタイプ化させ、極端に行う。特徴を列挙すると以下の通りである。
①高校の授業風 編 : 知識の教授は重要だが、やりとり重視の授業をする。「グループ活動」などを取り入れる。丁寧な板書をする。わからないときでも、何とか答えてもらおうとする。興味関心をひくよう工夫する。50 分間で内容を完結しようとする。
②大学の授業風 編

ほぼ一方的に話す。「学生と教員のやりとり」はあっても、「グループ活動」等はない授業を行う。「あなたの考えはどうですか？」と学生の考えを求める。系統だった板書はしない。聴いていようがいまいが、かまわずにつき進む。

（3）高校の授業風の授業の具体例

高校生風の授業の「導入」と「展開２」の部分は以下のようになる。グループ学習などをとりいれ授業を活性化させるよう工夫する。

時間	教員の指導	生徒の反応
導入 5 分	①「外国人が行く日本の観光地といえばどこだろう？」	①「京都」「鎌倉」「秋葉原」「スカイツリー」など
	②「では、オーストラリアの観光といえば、どのようなところがある？」	②「カンガルーやコアラがいるところ」「グレートバリアリーフ」「あの大きい石みたいなやつ」など
	③「世界的な観光地であるオーストラリア、観光地の代表といえば『国立公園』だが、その国立公園にはそれぞれ立地上特徴がある。それを今日は考えてみよう」	

時間	教員の指導	生徒の反応
展開２ 15 分	①「実は観光客といっても本国の人と外国の人とでは行き先がちょっと違っています。〈図３〉を見て違いとその理由をグループで考えてみようか（5 分）」（左が国内、右が外国人）	①グループ活動をする。
	②発表させる（いくつかのグループに）。	②「国内観光客は南東にほぼ集中（どちらかというと南より）、しかし外国人は北のほうまでしかも内陸にも及んでいる」という答えはでるだろう。→その理由は「本国人は大都市好き？外国人は暑い所が好き？」「オーストラリア人は普段から自然に親しんでいるから休みの時は都市が好き？」など
	③説明「本国人は大都市の近くで自然を日常的なレクリエーションとして国立公園を利用し、外国人は自然のなかでどっぷりひたって外国の非日常的な体験をしたいようだ」と説明する。	

5　評価について

（1）授業シート

毎回授業の終了時に「授業シート」を各人に記入させる（A4 用紙）。

学籍番号（　　）氏名（　　）	
評価項目	ポイント
①他者の考えをよく聴き、自分の考えを持てましたか？	1・2・3
②積極的に参加できましたか？	1・2・3
③発言できましたか？	1・2・3
④出席	3
⑤「がんばっていた人」を挙げてください。（理由も）	
⑥今日新しく学んだことはなんですか？	

①～③は、自分に対する評価である。①は「思考・判断」、②は「関心・意欲」、③は「表現」である。④の出席は、出席点である。⑤は他者評価である。個人は他人と共に学ぶものであり、他者を評価することは自分をも高めることになるとの考えからである。名前が挙がれば 3 点とする。⑥は授業中のことについてメモをとらせる。たくさんとればとるほどよいとする。このメモの量・質をみて、この部分は教員が評価する。

最終レポートのみが 15 回の評価となるわけではなく、毎回毎回の授業が評価の対象である。

（2）ポイントについて

自己評価分（①②③）で 9 点、出席点（④）で 3 点、他者評価分（⑤）で 3 点、教員評価（⑥）で 15 点とする。合計点 30 点とし、授業は 15 回あるので総計 450 点、その 60%である得点を単位修得の目安とする。ただし、欠席があまりにも少ない者は履修を認めない。休みがちな学生については、呼び出し、声をかけ何とか続けさせるようにする。

6　おわりに

高校時代の「知る→覚える→試験」から大学の「知る→考える→発信する」という考え方への転換を促したい。その際、繰り返しになるが、高校生の視点からの授業づくりということと、いろいろな面からの評価を取り入れて行っていく。ただし、過干渉にはならないように指導していく。

繰り返すが、あくまでもこれは試案である。一度も実施していない授業案である。この試案の効果は、2013 年度の結果を待ち、判断することになるだろう。

参考文献

学習技術研究会『知へのステップ　第 3 版』, くろしお出版，2011 年

木下是雄『レポートの組み立て方』筑摩書房, 1994

佐藤 智明，安保 克也，矢島 彰『大学 学びのことはじめ¯初年次セミナーワークブック』，ナカニシヤ出版，2011

佐藤 望，湯川 武，横山 千晶，近藤 明彦（著）『アカデミック・スキルズ(第 2 版)』慶應義塾大学出版会，2012

清水幾多郎『論文の書き方』岩波書店，1959

専修大学出版企画委員会編,『知のツールボックス』,専修大学出版局, 2006 年

戸山田和久『論文の教室¯レポートから卒論まで』, 日本放送協会，2002

保坂弘司『レポート・小論文・卒論の書き方』, 講談社，1978

山田礼子『学士課程教育の質保証へむけて―学生調査と初年次教育からみえてきたもの』東信堂, 2012

バーバラ・グロス・デイビス『授業の道具箱』東海大学出版会，2002